

国立民族学博物館の収蔵品 ④8

# 貝殻からみた神像付き椅子



神像付き椅子。6種類の貝が装飾に利用される。

パプアニューギニア西部の低地の熱帯雨林には、長さ約千kmのセピック川が流れている。その川の中流域に暮らすのがイアトムル族である。彼らは、もともとサゴヤシのデンプンや魚を主食にしてきた。そして、村のなかには精霊堂が建てられていて、そこに「カワ・トゥギトゥ」と呼ばれる高さ2m近くもある椅子が置かれている。ただ、その椅子は人が腰を掛けるためのものではなく、先祖の像と椅子が一体となったもので、祖先の居場所と考えられている。いったいその像は、何を示しているのだろうか。

ここでは、神像のなかに装飾されている貝に注目してみる。貝類の研究者黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）に貝を同定してもらうと、

そこには実に六種類の貝が使用されていたのには驚いた。まずは、大きな顔の輪郭になる部分には、ハナヒラダカラとキイロダカラという二種類のタカラガイが線状につながられている。しかも外側はギザギザのある裏側、内側はお尻のようにになっている表側（背中の部分）を出している。さらに、その内側は丸みを帯びたムシロガイが線状に並べられている。その向きもそろえられている。

このほかにも、二つの目と額に出ている角のようなものにはイモ貝（アンボンクロザメ）がみられる。なかでも目の方はイモ貝を輪切りにした部分を利用してのが興味深い。しかも、その先にはサザエの蓋が置かれていて、あたかも人の目を模しているようにみえる。また。額には四枚の二枚貝（ザルガイ類）があるのも目を引く。この貝の本身は、地元の人が食べたのであろうか。なお鼻の部分には、地元で放し飼いにされているブタの牙がつけられている。

私をもっとも関心をいだくのは、これら六種類の貝をどこからどのように内陸部に運ばれたのであろうかということである。一般に海岸部では貝が身近なものであるため、社会のなかで貝殻が儀礼利用に利用されることは少ない。多様な貝殻は別々の場所から集められて、この場で一つの造形物としてまとめられた可能性がある。貝の道の存在をとおして、神像付き椅子の社会的価値の高さがうかがえる。

なお、この神像付き椅子は、神奈川県立近代美術館 葉山館で九月二日(日)まで開催中の「国立民族学博物館コレクション 貝の道」にて展示されている。

（池谷和信）